

広域観光リクレーション開発地域

土地分類基本調査

阿川・仙崎

5万分の1

国土調査

山口県

1976

序 文

最近の、わが国の経済発展は、その発達史上前例がなく、加速度的で、それは同時に都市・農村・漁村において過密・過疎現象を生み、深刻な社会現象を生じてまいりました。限定された国土に、このような二つの現象が生じてきたことは対し、これを計画的・合理的に利用することが、いまわが国にとって緊急かつ重要な課題となってきたのであります。このような現況と、将来における経済社会の基本的発展方向を示唆するため、地域の特性に応じ、自然と人間の調和をはかりながら国土を有効に利用し、開発し、保全するための新全国総合開発計画が、昭和44年5月に策定されたのであります。

今回、国土調査事業の一環として、新全国総合開発計画に基づいた開発プロジェクト単位に、地形・表層地質・土壌等の土地条件、気象条件、土地利用現況、土地保全条件ならびに開発規制因子等を科学的・総合的に調査し、その実態を明らかにするため、当県においては昭和47年度以降これら土地分類基本調査を実施することになり、47年度「小郡」「宇部東部」48年度「宇部」「厚狭」49年度「西市」「小串」「安岡」50年度「山口」51年度「阿川・仙崎」「萩・見島・相島」の作成をおこないました。

当冊子では、「阿川・仙崎」図葉の地形・表層地質・土地および開発規制因子等について調査をおこなったので、この結果を有機的に組み合わせ、自然を荒廃させることなく土地資源の開発・保全・合理化・高度化のため、広く関係者が利用されることを切望する次第であります。

調査にあたっては、国土庁の助成と調整を得て、山口県土地分類基本調査作業規定に基づき、建設省国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図を基図として図簿の作成、資料集収をおこないましたが、これにご協力いただきました各位に対し、深く謝意を表する次第であります。

昭和52年3月

山口県企画部長 高 山 治

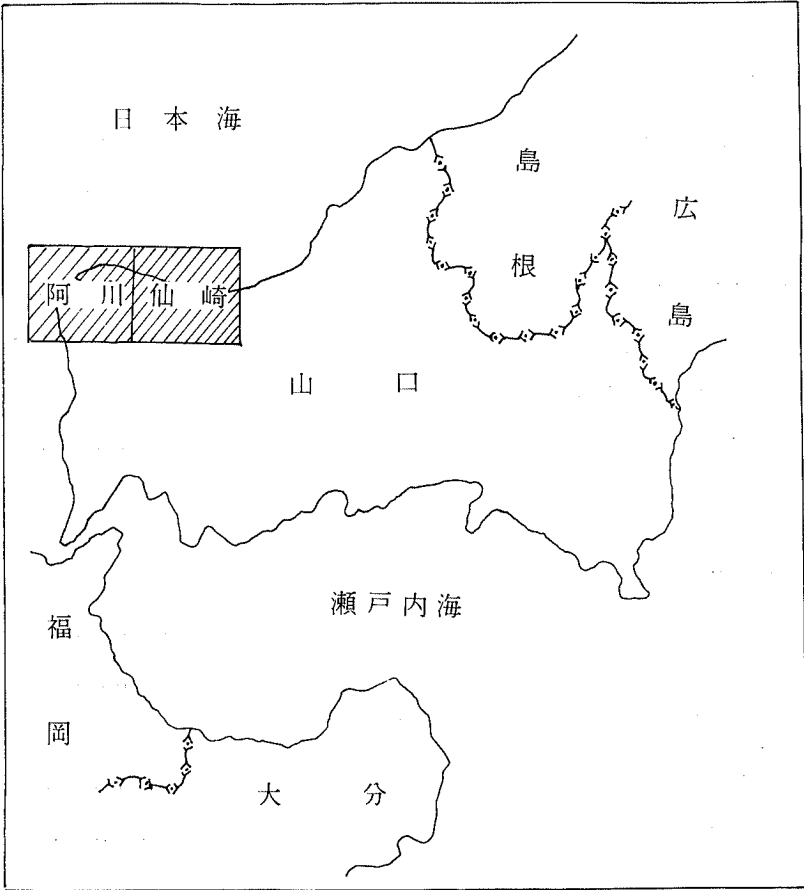
調 査 担 当 者

総括企画調整編集	山口県企画部企画開発課 同 併任山口県教育庁総務課	課 長 国土調査 課長補佐 指導主事	谷 口 恒 夫 木 村 喜 保 宇多村 讓
地形分類調査	山 口 大 学	教 授 同	小 野 忠 熈 三 浦 肇
表層地質調査	山 口 大 学 山 口 博 物 館	教 授 同 同 助 教 授 同 専門学芸員	河 野 通 弘 岡 村 義 彦 村 上 允 英 三 上 貴 彦 西 村 祐 二 郎 陶 山 義 仁
土 壌 調 査	山口県農業試験場 山口県林業指導センター	地力保全 室 長 専門研究員	井 尻 敏 文 藤 原 俊 廣
傾斜区分図	山 口 大 学	教 授 同	小 野 忠 熈 三 浦 肇
水系谷密度図	山 口 大 学	教 授 同	小 野 忠 熈 三 浦 肇
土地利用現況図	併任山口県教育庁総務課	指 導 主 事	宇多村 讓
開発規制図	併任山口県教育庁総務課	指 導 主 事	宇多村 讓

目 次

I	位置および行政区画	
1	位 置	1
2	行政区画	1
II	地域の特性	
1	自然的条件	2
2	社会経済的条件	4
III	主要産業の概要	7
IV	開発の現状	11
I	地形分類	
1	地形の概要	13
2	地形細説	14
II	表層地質	
1	表層地質の概要	24
2	表層地質細説	26
III	土 壌	
1	土壌の概要	30
2	土壌細説	32

「阿川・仙崎」位置図



I 位置および行政区画

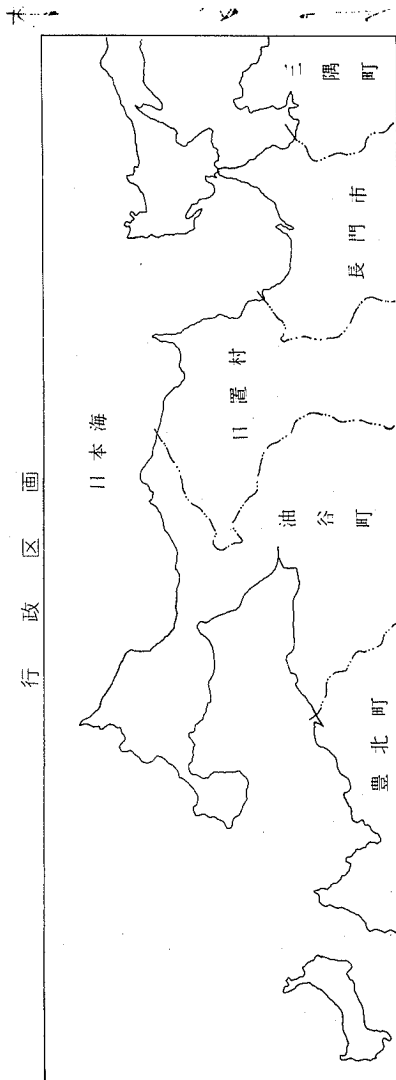
1 位置

「阿川・仙崎」図幅は、「阿川」と「仙崎」各図幅を統括したもので、そのいずれも本州最西端部で日本海に面し、経緯度はそれぞれ東経 $130^{\circ}45' \sim 131^{\circ}0'$ ・北緯 $34^{\circ}20' \sim 34^{\circ}30'$ 東経 $131^{\circ}0' \sim 131^{\circ}16'$ ・北緯 $34^{\circ}20' \sim 30^{\circ}30'$ で、図葉内の陸地面積は総計 208.7 km^2 である。

2 行政区画

「阿川・仙崎」図幅は、長門市・豊北町・油谷町・三隅町・日置村の1市3町1村の行政区画からなる。このうち豊北町は、「小串」図幅で記述するものとし、当図幅では省略する。

したがって、当図幅では長門市・油谷町・三隅町・日置村の1市2町1村について概述する。



Ⅱ 地域の特性

1 自然的条件

(1) 気象条件

当図幅内には、阿川観測所及び仙崎観測所がある。

本地域は日本海側気候区に属し、夏期や梅雨期は好天気めぐまれ、その結果用水不足になりやすい。冬期は北西の季節風が極めていちじるしく、雲天の日が続き、しばしば小雨や小雪をともなうが、積雪はほとんど見られない。

しかし、沿岸を流れる対馬暖流の影響で夜間の冷却がないため霜はまれで、そのため寒風を防ぐことができれば農作物の冷害は少ない。

観測所のデータによると、年間平均気温は阿川15.3°C、仙崎16.1°C、年間最高気温及び年間最低気温は阿川18.9°C・11.6°C、仙崎19.5°C・12.4°C、年間平均降雨量は阿川1774mm、仙崎1688mmを示しており、このことから阿川地域がやや気温が低く降水量が多いといえる。

阿川地域は地質的条件と相まって集中豪雨による地氾り災害が多く、広範囲にわたり「地氾り地帯」として指定されている。

月別平均気温		(阿川1966~1975 仙崎1941~1975)											1°C	
観測所	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
阿川		5.6	5.8	8.0	13.1	17.4	20.9	28.2	27.0	23.0	17.5	12.3	7.3	15.3
仙崎		6.6	6.4	8.8	14.1	14.1	21.4	26.3	27.4	23.5	18.2	13.2	7.7	16.1

月別最高気温		(1966~1975)											1°C	
観測所	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
阿川		9.5	9.7	12.4	17.7	22.3	24.7	28.9	30.6	27.0	22.0	16.7	11.5	18.9
仙崎		9.8	10.2	12.7	18.3	22.8	25.2	29.8	31.7	27.7	22.5	17.0	11.8	19.5

月別最低気温		(1966~1975)											1.0C	
観測所	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
阿川		1.7	2.5	3.4	8.0	12.4	16.6	20.0	23.2	19.0	12.8	7.9	3.3	11.6
仙崎		2.6	2.4	4.5	8.8	13.3	16.9	22.1	23.2	19.1	13.6	8.8	4.1	12.4

月別降水量

(1966~1975) 1mm

観測所	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
	阿 川		89	88	109	175	123	232	340	132	208	105	92	79
仙 崎		101	92	109	159	108	200	293	136	247	104	87	77	1688

観測所の位置

観測所名	設置箇所	所在地	緯 度	経 度	海 抜(m)
阿 川	第三中学校	豊浦郡豊北町	34°20.2′	130°55.6′	4
仙 崎	外海試験場	長門市仙崎	34°23.8′	131°11.8′	2

(2) 土地条件

当図幅は、山口県の最北西部に位置し、山地から急峻な断崖で、あるいは丘陵地から平野部を経て日本海にのぞむ風光明媚な海岸線や青海島、仙崎湾、深川湾、油谷湾の良港を有し、北長門海岸国定公園及び西長門海岸県立自然公園に指定された区域を有する地域である。

地形的には、図幅南部を地壘的に東西に連なる小起伏山地とそれに平行して発達する丘陵地、第三紀から第四紀に火山噴出した火山地及び北浦沿岸最大の平野である日置平野から形成されている。

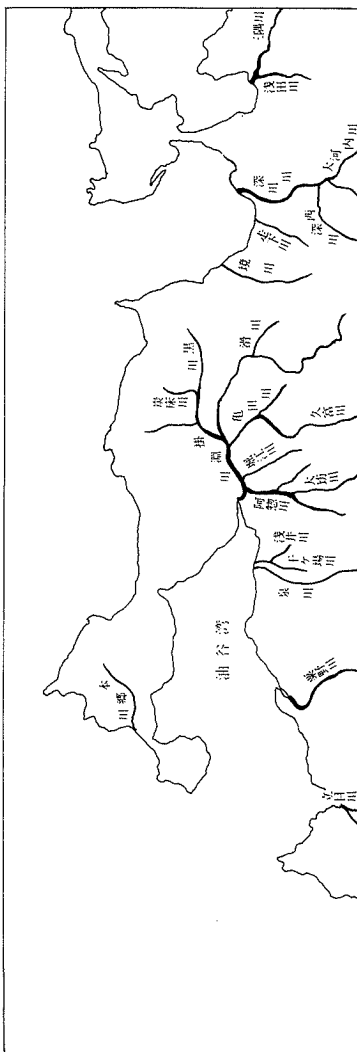
山地は鉄割山(490m)・草添山(517.4m)・原岡山(415.3m)・大藤山(374.7m)・ザレ山(390.3m)・宝蔵山(236.2m)等からなるが、いずれも200~500mで開析の進んだ晩壮年期の中起伏山地の地貌を示しており、この山地と平行に伊上~久富~大内山地域に丘陵地が発達する。山地及び丘陵地の相違は、それを構成している地質の差によるもので、前者は中生代白亜紀の火山噴出物の流紋岩質岩石、後者は第三紀の頁岩・砂岩からなる。

火山地は向津具半島及び雨乞山~千疊敷~天ヶ浦地域にかけ広範に発達しいずれも第三紀層の基盤上に噴出した玄武岩質の火山灰や熔岩で、これらは台地を形成している。このよらに下盤に第三紀層、上盤に玄武岩質岩石の地質構造地域は「地回り地帯」を形成し、県内では唯一の地域である。

現在、農林省・建設省・林野庁により「地回り地帯」として広範に指定がなされている。

河川は、掛淵川水系・浅井川水系・泉川水系・粟野川水系・沖田川水系・本郷川水系・走下川水系・深川川水系・三隅川水系があり、いずれも日本海に注ぐ。

主要河川図



2 社会経済的条件

(1) 交通

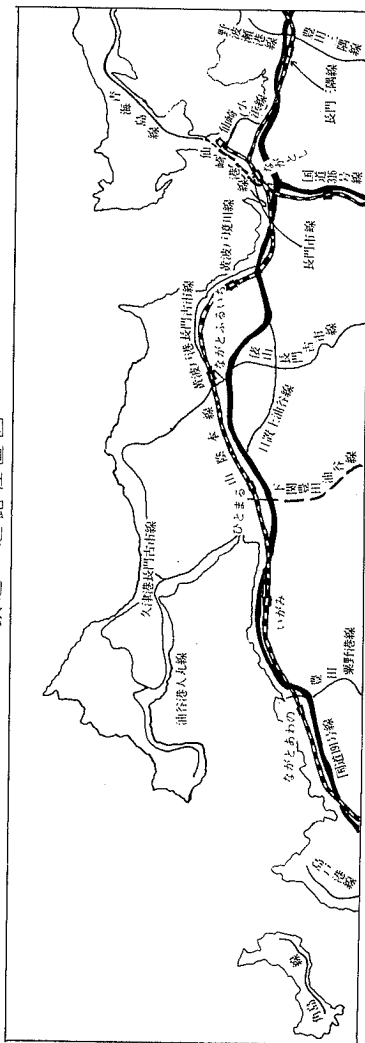
交通網体系は、国鉄山陰線と、長門市～山陽本線を南北に連結する国鉄美祢線，及び下関市から山陰側各市を経て益田市で国道9号線と連絡する国道191号線，また国鉄美祢線沿いに中国縦貫自動車道と連絡する国道316号線を軸に，主要県道2路線・一般県道14路線が有機的に配置されている。

昭和49年の国道191号線の油谷町伊上と三隅町中村の1日における交通量は1805台・4320台，国道316号線の長門市深川では1003台を数え，今後，観光客の増大等から，より一層交通量は増加傾向にある。そのためトンネル工事・舗装・あるいは改良工事による整備が進められている。

ア. 鉄道

国鉄山陰本線及び美祢線が施設されている。

鉄道・道路位置図



イ. 道 路

国道2路線，主要県道2路線，一般県道14路線が主な道路である。

国 道	191号線（下関市～広島市）		
	316号線（長門市～山陽町）		
主要県道	下関豊田油谷線	仙崎港線	
一般県道	黄波戸港長門古市線	油谷港人丸線	阿川線
	久津港長門古市線	仙崎小浜線	角島線
	豊田粟野港線	野波瀬港線	島戸港線
	俵山長門古市線	豊田三隅線	青海島線
	黄波戸境川線	長門三隅線	

(2) 人口の動き

昭和40年から50年の10年間にわたる人口動態を下表にみると、世帯数がやや増加し人口が減少、1世帯の構成人数が4人から3人に移行している。これは核家族化が、かなりの進捗で浸透していることを示している。さらに、人口の減少を実数よりみると長門市1919人、三隅町622人、油谷町2381人、日置村1326人で、これは40年における人口の、それぞれ6%、7%、17%、19%にあたる。これは、市街地域の長門市～三隅町では10人に1人、油谷町～日置村の農漁村地域では5人に1人の割合いで過疎化が進行したことを示している。

要約すれば、経済成長発展期を含むこの10年間に農漁村地域の油谷町・日置村は、市地域の約2倍の速度で過疎化が進行したといえる。

人口の動も

年 市町村	昭 和 4 0 年			昭 和 4 5 年			昭 和 5 0 年		
	世帯数	人口	1世帯 の人員	世帯数	人口	1世帯 の人員	世帯数	人口	1世帯 の人員
長門市	6,974	29,246	4.1	7,414 (1.06)	27,815 (0.95)	3.7	7,647 (1.09)	27,327 (0.93)	3.5
三隅町	1,695	7,843	4.6	1,757 (1.03)	7,221 (0.92)	4.1	1,790 (1.05)	7,221 (0.92)	4.0
油谷町	3,212	13,912	4.3	3,205 (0.99)	12,325 (0.88)	3.8	3,222 (1.00)	11,531 (0.82)	3.5
日置村	1,412	6,668	4.7	1,437 (1.01)	5,741 (0.86)	3.9	1,441 (1.02)	5,342 (0.80)	3.7

() は昭和40年対比

Ⅲ 主要産業の概要

日本海側に位置する長門市・三隅町・油谷町・日置村の昭和40年～50年にわたる高度経済成長期を含む10ヶ年の産業別就業人口の推移は、第1次産業が減少し、第2次及び第3次産業が増加の現象を示している。(表1)

第1次産業のうち、農業の減少はいちじをしく、長門市862人(26.9%),三隅

就 業 人 口

(表1)

市 町 村	産 業 別 年	総 数	第 1 次 産 業				第 2 次 産 業				第 3 次 産 業	そ の 他
			農 業	林 業	狩 猟 業	水 産 業	計	鉱 業	建 設 業	製 造 業		
長 門 市	40	13,821	3,202	45	1,379	4,626	71	1,102	1,483	2,656	6,536	3
		(1.05)	(0.89)			(0.92)				(1.05)	(0.13)	
	45	14,524	2,865	25	1,403	4,293	85	957	1,772	2,814	7,417	-
	(1.01)	(0.73)			(0.78)				(1.11)	(1.14)		
	50	14,090	2,340	10	1,265	3,615	45	1,235	1,680	2,960	7,495	20
		269	▲862	▲35	▲114	▲1011	▲26	133	397	304	959	
		[1.9]	[26.9]	[77.7]	[8.2]	[21.8]	[36.6]	[12.0]	[26.7]	[11.4]	[14.6]	
三 隅 町	40	3,760	1,630	34	429	2,093	9	244	284	537	1,127	3
		(1.04)	(0.94)			(0.95)				(1.23)	(1.13)	
	45	3,938	1,541	15	440	1,996	5	279	380	664	1,278	-
	(0.98)	(0.64)			(0.71)				(1.48)	(1.22)		
	50	3,690	1,045	10	435	1,490	5	380	410	795	1,385	20
		▲70	585	▲24	6	603		36	126	258	258	
		[1.86]	[35.8]	[29.4]	[1.3]	[28.8]		[14.7]	[44.3]	[48.0]	[22.8]	
油 谷 町	40	6,941	3,111	7	1,125	4,243	12	277	519	808	1,880	10
		(0.95)	(0.93)			(0.93)				(0.91)	(1.02)	
	45	6,639	2,899	12	1,057	3,968	19	259	464	742	1,929	-
	(0.89)	(0.75)			(0.78)				(0.94)	(1.14)		
	50	6,235	2,355	-	960	3,315	15	340	410	765	2,150	5
		▲706	▲756		▲165	▲928		63	▲109	▲43	270	
		[10.1]	[24.3]		[14.6]	[21.8]		[22.7]	[21.0]	(5.2)	(14.3)	
日 置 村	40	3,389	1,817	42	279	2,138	6	101	158	265	876	107
		(0.95)	(0.87)			(0.84)				(1.39)	(1.08)	
	45	3,230	1,586	6	214	1,806	10	124	236	370	950	103
	(0.88)	(0.84)			(0.83)				(2.01)	1.09		
	50	3,000	1,345	5	160	1,510	-	255	280	535	955	-
		▲389	▲472	▲37	▲119	▲628		154	122	270	79	
		(11.4)	(25.9)	(88.0)	(42.6)	(29.3)		(152)	(77.2)	(101.8)	(9.0)	

- ・ () は40年を基礎とする倍率。
- ・ [] は40年50年の差の40年の割合(%)
- ・ ▲は減少

町585人(35.8%)、油谷町756人(24.3%)日置村472人(25.9%)である。これは、昭和40年に農業に従事していた人が3人ないしは4人に1人の割合で農業を放棄したことをあらわしている。

また、水産業も長門市114人(8.2%)、油谷町165人(14.6%)、日置村119人(42.6%)と減少している。

これに対し、第2次産業及び第3次産業は増加がいちじるしく、特に長門市における観光客数は45年の87万人から49年の140万人、その消費金額は20億円から53億円(表7)へと増大しており、これは長門市の農業粗生産額27億円及び製造品出荷額127億円(表6)と匹適し得る収入源となっている。このように第1次及び第3次産業は増加現象を示してはいるが、各市町村の農業(表1、表3、表6)及び水産(表4)に対する依存率はいずれも高いことから、当地域は農林水産業を主体としながらも漸次海産物の製造業及び観光産業面への移動がなされていることがうかがえる。(表2)

農業粗生産額

(単位100万) (表2)

市町村	年	農業粗生産額	作物				畜産					農家1戸当り生産額(1000円)
			米	野菜	果樹	※1 合計	役肉牛	乳牛	養豚	養鶏	※2 合計	
長門市	45	1,549 (1.7)	560	172	54	852 (1.5)	92	64	167	374	697 (2.0)	406 (2.1)
	49	2,752	935	296	63	1,350	58	73	368	903	1,402	857
三隅町	45	662 (2.1)	277	85	56	473 (1.5)	76	9	34	70	189 (3.5)	386 (2.1)
	49	1,405	456	139	55	727	61	11	241	365	678	821
油谷町	45	1,221 (1.6)	769	86	40	954 (1.4)	104	28	13	122	267 (2.3)	370 (1.7)
	49	1,997	1,126	107	54	1,364	193	30	57	354	635	958
日置村	45	717 (1.8)	412	71	25	541 (1.4)	46	51	21	58	176 (2.8)	481 (1.4)
	49	1,317	646	94	22	811	52	66	78	309	506	922

・※1、※2 その他の作物及び畜産を加えた合計

・() は45年を基数とする倍率

家畜飼養戸数及び頭羽数

(表3)

市町村	年	肉用牛		乳用牛		豚		鶏 (総数)		(内)プロイラー	
		飼養戸数	飼養頭数	飼養戸数	飼養頭数	飼養戸数	飼養頭数	飼養戸数	飼養頭数	飼養戸数	飼養頭数
長門市	45	549 (0.4)	847 (0.5)	29 (0.8)	300 (0.7)	56 (0.6)	3,170 (1.0)	243 (0.6)	417,680 (1.1)	51	287,000 (1.4)
	50	234	449 〔1.9〕	24	214 〔8〕	38	3,434 〔90〕	1.50	473,380 〔3,155〕		421,600 〔8,266〕
三隅町	45	348 (0.4)	929 (0.6)	7 (0.2)	36 (0.8)	22 (0.4)	769 (3.2)	153 (0.8)	46,055 (3.0)	15	32,510 (4.0)
	50	167	629 〔3.7〕	2	30 〔15〕	9	2,484 〔276〕	133	138,336 〔1,040〕		130,500 〔8,700〕
油谷町	45	924 (0.6)	1,800 (0.8)	14 (0.7)	121 (0.7)	8 (0.7)	379 (1.2)	114 (0.6)	73,500 (1.8)	6	1,500 (35)
	50	611	1,440 〔2.3〕	10	88 〔8〕	6	481 〔80〕	71	135,777 〔1,912〕		53,500 〔8,916〕
日置村	45	429 (0.5)	649 (0.6)	33 (1)	195 (1.0)	33 (0.5)	422 (1.2)	40 (0.5)	22,684 (6.8)	8	6,500 (5.7)
	50	232	441 〔1.9〕	33	205 〔6〕	19	543 〔28〕	22	154,419 〔7,019〕		37,500 〔4,687〕

・ () は45年を基数とする倍率
 ・ [] は1戸当りの飼育数

海面漁業

(表4)

市町村	年	漁 家 状 況						漁獲量
		経営体数		漁船数	漁業世帯数	漁業世帯員数	漁業就業者数	
		総数	(内)個人					
長門市	43	501 (1.0)	484 (1.0)	626 (1.0)	959 (0.8)	4,492 (0.8)	1,251 (0.9)	20,836 (1.2)
	50	526	513	687	846	3,882	1,181	22,939
三隅町	43	165 (1.1)	161 (1.0)	225 (1.1)	308 (0.8)	1,482 (0.8)	482 (0.8)	3,181 (0.6)
	50	183	174	251	272	1,307	415	2,089
油谷町	43	637 (0.8)	624 (0.8)	668 (0.9)	822 (0.9)	3,683 (0.8)	1,239 (0.8)	6,318 (0.9)
	50	564	553	638	748	3,177	1,008	5,877
日置村	43	93 (1.0)	93	106	161 (0.8)	783 (0.8)	211 (0.8)	726 (1.7)
	50	94	93	106	143	654	173	1,238

・ () は45年を基数とする倍率

業種別事業所数・従業者数・製造品出荷額

(単位万円) (表5)

市町村	年	総数		
		事業所数	従業者数	製造品出荷額等
長門市	45	238 (0.8)	2,195 (1.0)	635,820 (2.0)
	49	213	2,410	1,278,146
三隅町	45	39 (0.9)	333 (1.0)	65,853 (2.4)
	49	37	357	261,462
油谷町	45	494 (0.1)	494 (1.2)	62,678 (2.6)
	49	87	621	164,801
日置村	45	23 (1.1)	119 (1.2)	16,950 (0.02)
	49	26	150	369

・ () は45年を基数とする倍率

製造品出荷額及び農業粗生産額の比較

(単位100万) (表6)

市町村	年	製造品出荷額	農業粗生産額
長門市	45	6,358 (2.0)	1,549 (1.7)
	49	12,781	2,752
三隅町	45	658 (2.4)	662 (2.1)
	49	1,614	1,405
油谷町	45	626 (2.6)	1,221 (1.6)
	49	1,648	1,991
日置村	45	169	717 (1.8)
	49	3	1,317

観光客数

(単位1000人、1000円) (表7)

市町村	年	観光客数			観光客の消費金額	県外観光客地方別区分			
		総数	県外客	県内客		中国	四国	九州	その他
長門市	45	876 (1.6)	701 (1.5)	175 (1.6)	2,084,420 (2.5)	163 (1.3)	29 (2.1)	275 (1.4)	234 (1.8)
	49	1,402	1,121	281	5,385,685	214	63	406	438

Ⅳ 開発の現状

日本海に面して連なる長門市・三隅町・油谷町・日置村の行政区画で代表される長門地域経済圏は、工業立地・水資源の開発が充足されていないため企業が少なく、中小企業の水産食料品の製造・木材関係と自然環境を生かした農林漁業及び観光を主要産業として形成されている。自然環境は、仙崎湾・油谷湾の良港や本県の主穀地帯の一つである日置平野、有名な青海島を有する北長門海岸国定公園・西長門海岸県立自然公園があり、また湯本・俵山・湯免・黄波戸の各温泉・史跡等豊富な観光資源に恵まれ、秋芳洞や萩とともに本県の自然的歴史的観光リクレーション地域を形成している。このような地域にある1市2町1村の産業開発及び社会開発の概略について述べる。

産業開発については、自然条件の特徴を生かした農林業・漁業の振興と観光リクレーションの開発に重点がおかれている。農林業においては圃場・農道・用排水路等の土地基盤整備、適地産業によるキャベツ・玉ネギなどの野菜やかんきつ・栗を主体にナシ・ブドウなどの果樹、花木、畜産の広域濃密生産団地の形成、造林の拡大と林道網の整備、シイタケ等特殊林産物の育成がなされ、これに伴う冷蔵貯蔵施設の整備による集出荷体制の確立と流通の改善が図られている。

水産については、漁業生産基盤整備として大型漁礁設置、水産資源対策としてマダイ・アワビ・サザエ等の放流、養殖漁業としてタイ・ハマチ・車エビ・カキ・ノリ・ワカメ等の生産が行なわれ、出荷体制の確立が図られている。

観光リクレーションについては、北長門海岸国定公園及び西長門海岸県立自然公園の青海島や油谷湾と、湯本・黄波戸の温泉地及び史跡を相互関連し、観光産業の一層の発展を期して広域観光ルートの設定が図られ、整備がされつつある。

社会開発については、公共下水道整備、ごみ処理施設整備、養護老人ホームの拡張や設置、集会・娯楽・温泉施設を備えた老人憩の家が計画・設置され、また、油谷町の県立「青年の家」を拠点として勤労青年や少年の集団宿泊訓練がおこなわれ、自己開発・仲間づくり・心身の鍛練を通じ、人関形成が図られている。

(宇多村 譲)

各

論

I 地形分類

1 地形の概要

「阿川・仙崎」図幅は、「萩」図幅の西、「小串」・「西市」図幅の北に接しており、山口県の北西端に位置し、きわめて変化に富む海岸地形とともに玄武岩台地や第三紀層からなる小起伏丘陵に特色のある地域である。地形要素別の面積構成比の概略は、山地32%、火山地13%、丘陵地27%、島9%、低地19%であって、山口県の北浦（日本海）沿岸においては萩以東の沿岸地域と比べて、丘陵地や低地の占める比率の高いことが注目される。とくに日置平野（油谷低地）は面積約19km²に及び、北浦沿岸最大の平野である。因みに北浦沿岸の低地の面積の概略をかかげると次のようである。奈古低地3km²、大井低地3km²、萩低地15km²に対して、本図幅中の三隅低地8km²（萩図幅内の三隅低地もふくむ）、深川低地10km²、油谷低地19km²、粟野低地4km²（小串図幅の粟野低地もふくむ）である。

本図幅の山地は、分水界山地の天井ヶ岳、草添山の中起伏山地の北斜面に当たり、高度300~500mの開析の進んだ晩壮年期の地貌を示しているが、その北側は十楽一貝川断層線によっていちじるしく平夷な油谷丘陵と明瞭に境されている。油谷丘陵は神田丘陵に連続する小起伏丘陵で、瀬戸内側の侵食平地面と対比するとすれば、瀬戸内面の下位の侵食面に相当すると考えられ、厚狭丘陵や宇部丘陵に類似した性質をもつ。また、火山地は第四紀の玄武岩が向津具半島や雨乞台などに広く分布し、この玄武岩と基盤の第三紀層の境界付近には特異な地回り地形が広範囲にわたって発生しており、農業上のみならず、交通・建設上も重要な問題をはらむ地方となっている。

本図幅における地形の性状とその分布を説明するために、次の地形区に区分した。

I 山地

- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| I a 日置山地 | I b 花尾山山地 | I c 鉄割山山地 |
| I d 草添山山地 | I e 天井ヶ岳山地 | I f 宝蔵山山地 |

II 火山地

- | | | |
|------------|------------|------------|
| II a 油谷島火山 | II b 向津具火山 | II c 雨乞山火山 |
| II d 千畳敷火山 | II e 矢ヶ浦火山 | II f 成瓜山火山 |
| II g 粟野岳火山 | II h 島戸火山 | |

III 丘陵地

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| III a 向津具丘陵 | III b 蔵小田丘陵 | III c 日置丘陵 |
| III d 三隅丘陵 | III e 深川丘陵 | III f 油谷丘陵 |
| III g 豊北丘陵 | III h 神田丘陵 | |

IV 島

- | | |
|---------|----------|
| IV a 角島 | IV b 青海島 |
|---------|----------|

V 低地

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| V a 向津具低地 | V b 三隅低地 | V c 深川低地 |
| V d 油谷低地 | V e 粟野低地 | V f 阿川低地 |

2 地形細説

I 山地

I a 日置山地

西の千畳敷玄武岩台地と東の矢ヶ浦玄武岩丘の間であって、これよりも低く、高度 250m ばかりの山地であるから、むしろ丘陵状の地貌を呈しているが、この山地の北東側斜面は関門層群に属する砂岩、礫岩からなり、傾斜も 30° 前後を示す谷密度のかなり高い斜面をなし、海岸線は海食崖に縁どられている。南西側は古第三紀の安山岩からなり、傾斜 15° 前後のゆるやかな斜面となって油谷低地に接しているが、その末端には洪積台地を付着しているところもある。

II b 花尾山山地

「西市」図幅の花尾山（669.1m）を最高とする中起伏山地の北西端の一部がみられる。北東方向に直線状に走る断層性の二条窪の深い河谷によって鉄割山山地と境される。

I c 鉄割山山地

鉄割山（490.1m）を最高長とする開析の進んだ中起伏山地で、白亜紀

の凝灰岩や角礫岩など火山性岩石からなる。

I d 草添山山地

草添山(517.4m)を最高点とし、原岡山(415.3m)や熊野岳(359.2m)などをふくむ中起伏山地で、瀬戸内斜面の木屋川と本図幅の掛淵川流域との分水界山地であるが、掛淵川とその支流久富川、大坊川の河谷による開析が深く進んでいて、それぞれ草添山、原岡山、熊野岳の三つの山塊に分かれている。大部分白亜紀の凝灰岩類からなり、細かく侵食されて、密に夔の発達した谷密度の高い地貌を呈しており、とくに熊野岳はこの傾向が強く、谷密度は30~50/kmを呈し、山口県下でも最高密度の値である。ただ、山頂部が細粒流紋岩質凝灰岩からなる原岡山は地名どおり、15°前後のゆるやかな斜面をもち、谷密度は20~30/km程度で低く、対照的である。この山地の北側は第三紀層からなる丘陵地とは十楽一貝川断層線を境に比較的明瞭な地形差が見られる。

I e 天井ヶ岳山地

「西市」図幅の天井ヶ岳(691.1m)を最高点とする中起伏山地の北部があらわれているが、高度は数段低くなっており、400m前後の大藤山(374.7m)やザレ山(390.3m)の小山塊に分かれている。白亜紀の火山性岩石からなり、その北側の第三紀層からなる油谷丘陵との境界は十楽一貝川断層線によって画され、草添山山地の場合よりもさらに明瞭な差別侵食による地形差が見られる。

I f 宝蔵山山地

宝蔵山(236.2m)をふくむ小起伏山地の北本部が本図幅に見られる。この山地の高所には大浦岳(265m)と粟野岳(269m)の小玄武岩台地がついていて、その境界付近には侵食谷の谷頭に崖錐状の緩斜面が発達して、水田の立地を可能ならしめる条件となっている。

II 火山地

II a 油谷島火山

向津具半島の大浦(羅漢)地峡より西の油谷島の主として玄武岩からなる台地状の火山地であるが、高度150m以下のなだらかな小起伏の丘陵性

の地形を示す。基盤には第三紀の凝灰岩、砂岩、頁岩などが南部と東部にわずかに露出しており、本油谷付近ではその境界に地入り地形が生じている。泊にわずかに低地が見られるが、これは泊崎の砂州に囲まれた潟湖起源の低地である。

I b 向津具火山

大浦地峡と小田地峡の間の玄武岩台地で、面積的11km²を占め、北浦地方で最大の玄武岩地域である。最高点は道元山東方の226m丘で、他は150m前後の高度のなだらかな丘陵性の地形を呈し、内部には約0.6km²の盆地状の向津具低地をもっている。おそらく第三紀層を切る比較的密な断層系に支配されて、各所から玄武岩の噴出を見、それぞれの小台地状のあるいは火山丘状の山体が複合して、15°前後のゆるやかな起伏をもつ丘陵状の火山地をつくったものと考えられる。

I c 雨乞山火山

第三紀層からなる蔵小田丘陵をおおうて、西部では高度100m付近から、東部では200m付近以上の高所に分布する玄武岩台地で、雨乞山(347m)を最高点とする火山地である。丘陵状の向津具半島の玄武岩とも、また台地状の千畳敷玄武岩とも異なっており、この雨乞山玄武岩地域は北東部の311.5m山から雨山を経て西方のみのが峠、妙見山(257.3m)に至る間、高度250m~300m以上の部分で傾斜20°~30°の山積状をなしており、この山積の南北両側においては急にゆるやかな5°~15°のいちじるしく緩傾斜の台地をなし、それ以下では第三紀層の丘陵斜面に漸移していく地形を示している。そしてこの境界付近が多くの場合地入り地形の発生する場所となっており、とくに北斜面において顕著である。

I d 千畳敷火山

雨乞山の東方の玄武岩台地で、最高点は330m以上を示す。雨乞山とは対照的に千畳敷の地名が示すように、山頂一帯は8°前後のゆるやかな傾斜の草原となっている。その北側は下部にせまく古第三紀の安山岩や関門層群に属する砂岩、礫岩があって、この部分が30°~40°に及ぶ急斜面や海食崖をつくっていて、その高さ250mにも達するところがあり、北浦沿岸最高の断崖として知られている。

II e 矢ヶ浦火山 II f 成瓜山火山

日置丘陵内の高所に見られる玄武岩丘である。向津具半島半島や雨乞山とちがって分布範囲は狭く、とくに成瓜山などは周囲の丘陵地における侵食谷も火山体にくいこんでこれを開析しており、丘陵地と区別しがたい地貌と呈している。矢ヶ浦山の玄武岩はN 45° W方向の二位ヶ浜一黄波戸断層線を境に分かれる第三紀層からなる日置山地と白亜紀の砂岩、礫岩からなる日置山地との両者をおおうて噴出した玄武岩の小台地（むしろドーム状の小丘である）であって、断層線に関連し、異なる地形・地質の上にある火山地として注目される。

II g 粟野岳火山

室蔵山小起伏山地の中央に、「小串」・「阿川」両図幅にまたがって、粟野岳（269m）と大浦岳（265m）の2つの玄武岩丘が見られる。とくに西側の大浦岳（最高点は南の阿川図幅内の287.2m）の山頂部は平頂性あるいは台地状の地形を示し、この火山地斜面はほとんど開析が進んでいない。

II h 島戸火山

島戸浦付近に見られる小規模な三つの火山丘で、第四紀の玄武岩からなる低い台地状あるいは丘陵状の地形を呈す。そのうち長羽山（110.7m）がやや大きく、15°前後のゆるやかな斜面はほとんど耕地化されている。島戸浦の半島部を占める玄武岩は高度50mばかりの低い小岳地である。

III 丘陵地

III a 向津具丘陵

向津具玄武岩台地の南側から東側にかけて、ほぼ高度100m以下に砂岩、頁岩、凝灰岩などからなる第三紀層があらわれている。丘陵とはいってもその上部に玄武岩がのり、その境界付近から海岸に向ってゆるやかな斜面をつくっている。侵食谷の発達は未熟で、谷らしい谷はほとんどなく、よく耕地化され、意外に土壌条件や水利に恵まれて水田化されているところが多い。その中には地形分類図に示したように、地汭りによって生じた馬蹄形の10°前後の緩傾斜地が特徴的である。白木、田久道、久原、中の木などこうした地形のところ立地している。

Ⅲ b 蔵小田丘陵

小田地峡以東の第三紀層の地域で、高度100mあるいは東部では200m以上の高所には玄武岩がのっており、それ以下の小起伏の丘陵地である。この丘陵地はいちじるしく谷密度が小さく、津黄付近や蔵小田上付近に局地的にやや、谷密度の高いところがあるが、概して0~3/km程度であって、侵食谷はほとんど発達していないといってよい。これは向津具丘陵の場合と同様に、玄武岩との境界付近に始まる地回り地形が多いこともその原因のひとつであるが、油谷低地の南側の同じ第三紀層の丘陵が延長河川によって小丘陵に寸断された地形となっているのはきわめて対照的で、地質の配置、地形の差もその原因のひとつである。

Ⅲ c 日置丘陵

西は油谷低地にのぞみ、東は深川湾の海岸線で限られ、南は草添山中起伏山地に接する丘陵地である。主として第三紀層からなるこの丘陵の北半部は二位ヶ浜一黄波戸断層線を境にして、日置山地や矢ヶ浦山火山とは異なる明瞭な差別侵食による地形差を見せている。高度200m以上にある矢ヶ浦山玄武岩丘の部をのぞいてみると、海岸付近は20°~30°の比較的急傾斜であるが、全体に10°前後の緩斜面の台地状の地形を呈し、侵食谷の発達はほとんど見られない点など、向津具丘陵や蔵小田丘陵と同様で、ここにも地回り地形の特色が見られる。この丘陵面の大部分が水田化され、矢ヶ浦、芽刈、浅津の集落は玄武岩との境界付近の水利に恵まれたところに立地している。日置丘陵の南半部は一部に関門層群に属する岩石からなるところもあるが、大部分第三紀の礫岩、頁岩、凝火岩などからなる丘陵地で、谷密度は20~30/kmで、油谷丘陵、蔵小田丘陵に比べると谷密度は比較的高い。さらに深川湾側の斜面の方が谷密度が高く、開析が進んでいる。

Ⅲ d 三隅丘陵

三隅低地の北側に位置する高度200m以下の丘陵地で、三見付近から大井付近まで沿岸地域に断続的に分布する丘陵地の一部を構成している。

Ⅲ e 深川丘陵

鉄割山中起伏山地の北端に低く高度100m以下の小起伏丘陵が付着するような形で見られる。その中には田屋山、三上山、市役所背後の小丘などの

ように深川低地内に分離して島状に分布しているものもこれにふくめる。

Ⅲ f 油谷丘陵

南側の、天井ヶ岳や草添山の中起伏山地とは、十楽一貝川断層線によって明瞭に境され、その北側に低く位置する高度50m前後のいちじるしく小起伏の丘陵地である。向津具丘陵や蔵小田丘陵と同じような地質構造であるにもかかわらず、油谷丘陵の地貌はこれらとは著しく異なっている。前二者は侵食谷の発達のはなはだ未熟であるが、油谷丘陵は背後の山地を深く開析してそのまま北流する多くの河流によって切られ、油谷湾あるいは油谷低地に向って北方あるいは北西方に伸びる狭長な低い尾根状の小丘陵が櫛の歯のように並んでいる。これらの丘陵群は東部で50m~80mの高度を示すが、西部では50m以下となり、丘陵間の低地も東部では扇状地の特徴をもつが、西部では一部に砂礫台地もあるけれども、一般に沈水して生じたとみなされる埋積性の谷底平野の分布するところから見て、西部の丘陵の高度が低いのは相対的に東部よりも沈降していることが考えられる。

Ⅲ g 豊北丘陵

粟野川下流域に見られる高度100m以下の丘陵地である。宝蔵山山地の山麓帯にも同じ性質の丘陵地が見られる。

Ⅲ h 神田丘陵

「小串」図幅の矢玉付近から特牛を経て島戸付近にかけて沿岸地域に広がる高度100m以下の平夷な侵食平坦面と考えられる丘陵地である。瀬戸内側の侵食面との関係を見ると、瀬戸内面の下面面である厚狭丘陵、宇部丘陵に対比でき、油谷丘陵も同じ性質の侵食平坦面であるとみなされる。

Ⅳ 島

Ⅳ a 角島

面積4.09km²の台地状の沿岸島である。中央の巾220mの狭隘部を境に東半部と西半部ではかなり異なった地形を示している。東半部は第三紀層を基盤としてその上に噴出した高度50m~60mの玄武岩台地がのっており、西迫付近の浅い河谷を除いて、ほとんど侵食谷は発達していない。島の西半部は地質的には古第三紀の古い安山岩と第四紀の新しい玄武岩からな

り、またこれらの火山岩を蔽って礫層の載るところもあって、高度は30m~40mのきわめて小起伏の丘陵状の地貌を呈し、西縁部の玄武岩のところは15°以下の緩斜面をなしている。中央の狭隘部北岸および南岸、さらに尾山の北方の海岸線には砂浜海岸が発達しているが、とくに北岸は北西季節風の影響が強く、飛砂が高度20m付近まで被覆している。

IV b 青海島

仙崎の尖角状砂州の北に、わずか100mの仙崎水道をへだてて浮ぶ、面積14.6km²の沈水島で、屈曲に富む海岸線をもつ。主として白亜紀の凝灰岩類からなるが、高山(319.9m)や寺山(271m)、山島山(248.7m)など高所に玄武岩が載っている。

島の北岸は海食によっていちじるしく海岸線が後退しており、島を東西に走る分水界を境に北斜面と南斜面の面積の比はおよそ4:11である。北岸には高さ50m~100mの海食崖が連続しているが、とくに東部の海岸で高く、島見門付近で100mお越え、高崖では200mに達する。中央付近では海食岩柱が群在し、十六躰漢が有名であるが、最大の岩島釣井瀬は高さ40mでてる。西部には海食洞が多く発達し、奥行80mもある黄金洞や50mの観音洞が代表的で、長浜群洞は60箇所もの洞穴が並んでいる。これらは北長門海岸国定海岸の中でもとくにすぐれた海食景観として知られている。

島の南岸は内湾に面して、小岬角と湾入が交錯して複雑な海岸線をなすが、その東部と西部では異なった海岸地形の発達時期をあらわしている。仙崎湾に臨む東部の海岸は湾頭にわずか低地が見られるのみで、沈水海岸の初期の状態を示しているが、深川湾に面した西部の海岸ではすでに沿岸における各種の堆積が進んで、いちじるしい変化が生じ、沈水海岸の晩幼年期の地形に達している。青海湾頭には小規模ながら三角州の堆積が進め、湾口には巾50m長さ1.1kmの砂州の波の積立が青海湾をほぼ完全に閉塞して内側に面積0.65km²の潟湖(ラグーン)である青海湖をつくり出している。

V 低地

V a 向津具低地

向津具半島の玄武岩台地の中の盆地状の小低地で、高度10m~50m、面

積0.6kmばかりである。本郷川の一つの谷底平野としての性質もあるが、むしろ玄武岩丘に囲まれた旧湖盆を起源とする原地的な低地であると考えられる。山麓付近には基盤岩の第三紀層が露われており、玄武岩との間にはしばしば礫層をとまなうところが多く、そのため比較的水利に恵まれた小盆地で、浅い谷頭の溜池も加わって、盆地床はくまなく水田化されている。その耕地形態は条里型地割を原型としており、その地積はおよそ2千町程度である。この盆地の開発は古代にさかのぼるものと考えられ、古代の向国郷の本拠に比定できる。

V b 三隅低地

三隅断層谷の中を流れる三隅川の谷底平野や三角州平野を主としてその前面に干拓地が加わり、さうに鉄割山北麓下には砂礫台地や扇状地も見られ、いくつかの特徴ある地形をふくむ低地である。三隅川の谷底平野には豊原の集落の西方の低地に条里型地割類似の耕地が約20町ばかり見出される。この方格地割は三角州平野に移る部分で全く異なる別系統の新しい地割に変わり、平野地形の差が開拓時代によって異なる耕地形態の差と対応している点が興味深い。この三角州平野の中には河跡湖（三日月湖）が残っており、山口県下では他に類例の少ない珍しい地形である。

V c 深川低地

深川川の下流に発達した谷底平野や三角州平野のほかには砂礫台地や扇状地、自然堤防、砂州、旧潟湖などさまざまな平野地形をふくむ低地である。

深川川に大河内川が流入する付近の広い谷底平野にはほとんど集落はみられず、殿台、小河内、河原など河岸段丘（砂礫台地）上に集落は立地している。この谷底平野内には右岸にも左岸にも旧河道の微地形が多く、沓濫原の特徴をもつ低地である。

草添山の北東斜面はその中腹を西北西に走る断層線を境に急に高度を減じて侵食谷によって深く開析され、板持川、五十鈴川、走下川などが比較的大きい扇状地をつくっている。これには新旧の二段があって、旧扇状地（洪積扇状地）は開析されて、新しい扇状地の両翼に段丘化して残っている。五十鈴川の一つの新しい川西扇状地がもっとも大きく、面積は約1km²、勾配は491000~391000（約2°）である。その扇端は高度10m付近で深川川によって削られ段丘崖をつくっている部分がある。

三角州平野は井出口付近から下流の上郷，下郷，下川西をふくむ低地である。河口はもと妙見山の東側は開口していたが，現在は妙見山の西側に付け変えられ，旧河口は漁港として整備されている。妙見山は三角州の先端に繋がれた陸繋島であり，その両翼に砂州に起源をもつ砂浜海岸が延びている。深川低地の北東端はこの砂州が田屋山陸繋島を陸封してさらに北東に延びて尖角状砂州を形成したもので，ここに長門市の港町仙崎の市街地が発達している。この砂州は仙崎湾沿いに南東にも延びて白濁の小砂嘴をつくり，その内側には旧潟湖性の低地をかかえている。

V d 油谷低地

油谷湾に流入する掛淵川の流域に発達した盆地状の低地で日置平野とも呼ばれる。面積約18km²，山口県の北浦沿岸では最大の平野である。第三紀層からなる小起伏丘陵に囲まれた東西に長い低地で，谷底平野，三角州平野，干拓地，砂礫台地，扇状地からなる。地形上の特徴からみると，掛淵川本流沿いの東西方向の低地と南側の山地，丘陵を開析してこの低地に入ってくる北流する掛淵川（中流），久富川，大坊川，泉川などがつくる低地の2つの小地形区に分かれる。

前者の掛淵川低地は河口付近の高度2 m以下の干拓地，つづいて5 m以下の三角州平野，それ以東の高度5 m~40mの谷底平野からなるが，この盆地状の谷底平野は古市付近かう西にのびる低い砂礫台地（沖積段丘？）があつて盆地の中央部が東西方向に高くなっており，日置山地の山麓近くを西流する黒川に沿う低地がもっとも低くなっている。

後者の北流する諸河川をつくる低地は，砂礫台地（洪積段丘），扇状地，谷底平野のいずれかあるいはその2つ以上の組み合わせである。もっとも東側の掛淵川中流の低地は洪積段丘と扇状地からなり，西側の新市，小野地の集落ののっている洪積段丘は比高10m~15mを示し面積0.7km²で，ほとんど水田化されている。東側にも一貫瀬の一段低い台地があり，両者の間に扇状地性の低地が国広から狩宿付近まで張り出している。久富の低地は砂礫台地よりも扇状地の方が広く，水田化が進んでおり，この扇状地をつくった久富川は扇頂で流路を替えられて東隣の植松の谷底平野を流下している。伊上の低地は泉川をつくる扇状地の西側に岡や宮ノ馬場の集落ののる洪積台地が海岸線まで延びている。伊上浦や前方，須方，綾古の低

地は沈水した河谷の出口につくられた砂州の内側に埋積性の谷底平野が形成されて、旧砂州が集落の立地場所に選ばれている。

V e 粟野低地

粟野川下流の低地であるが、沈水性の河口付近は湾入してほとんど三角州平野の発達が見られない。これは入江状の三角江（エスチュアリー）型の河口低地で、河谷の埋積が十分に進んでいないため、氾濫性の狭長な谷底平野に不相応に巾の広い河道が目立つ。洪水対策のため、串山半島の基部に放水路がつくられている。

V f 阿川低地

阿川湾頭の低地で、沖田川や立目川の小河川につくる三角州平野や湾頭の旧砂州とその背後の低温地からなる。旧砂州の砂堆地に阿川が集落が立地している。

資 料

1. 岡本和夫・今村外治（1964）：山口県油谷湾付近の第三系 広島大学地学研究報告13号
2. 山口県（1951）：国立公園候補地 長門日本海岸の概要
3. 山口県教育図員会（1959）：山口県文化財概要 第3集 名勝，天然記念物
4. 山口博物館（1975）：山口県の地質

（三浦肇，小野忠憲）

Ⅱ 表層地質

Ⅰ 表層地質の概要

未固結堆積物としては沖積世に属する海浜砂、谷底平野・三角州・扇状地などを構成する礫・砂・粘土および洪積世に属し段丘を形成する礫・砂・粘土がある。

固結堆積物には砂岩、礫岩・砂岩・頁岩互層および安山岩・礫岩・砂岩・頁岩互層がある。砂岩は新第三系日置層群峠山累層および人丸累層、油谷湾層群川尻累層に属する。豊北町角島、向津具半島および油谷町伊上かう人丸を経て長門市正明市に至る山陰線沿線に分布する。礫岩・砂岩・頁岩互層は新第三系日置層群十楽累層および黄波戸累層、油谷湾層群伊上累層に属するものと白亜系関門層群に属するものがある。新第三系に属する互層は油谷町伊上、同町角山、長門市古市西方～北方山地に分布する。白亜系関門層群に属する互層は三隅町三隅、油谷町伊上南方に分布する。安山岩・礫岩・砂岩・頁岩互層は関門層群下関亜層群に属し、三隅町鉄割山と小島山に分布する。

火山性岩石には流紋岩質岩石、安山岩質岩石および玄武岩質岩石の3種類がある。流紋岩質岩石には白亜系阿武層群に属し、本図幅の南部に広い面積を占めて分布する。安山岩質岩石に属する安山岩には中新世、漸新世および白亜紀の阿武層群に属するものの3時期のものがある。これらのうち、中新世のものは小岩脈として産し、極めて分布が少ない。漸新世の安山岩は油谷町津黄～日置村黄波戸口に分布し、阿武層群中の安山岩質岩石は長門市古市南方にわずかに分布する。このほか、安山岩質岩石に属する玢岩が豊北町阿川にかなり広く貫入している。玄武岩には2時期のものがある。始新世の玄武岩は日置村今岬にわずかに分布している。鮮新世～洪積世の玄武岩には豊北町角島、向津具半島をはじめ本図幅内に広く分布している。

本図幅内に分布する深成岩類には花崗岩質岩石（花崗岩）、斑岩質岩石（閃緑岩）および斑岩（石英斑岩、文象斑岩）などがあるがいずれも小岩体である。

本図幅に分布する諸岩石のうち、白亜紀に属する流紋岩質岩石、礫岩・砂岩・頁岩互層、安山岩・礫岩・砂岩・頁岩互層は主として長門市青海島と本図幅の南半部に広く分布し、これに対して中新統の砂岩、礫岩・砂岩・頁岩互層と

鮮新～洪積世の玄武岩は本図幅の北半部に広く分布する。一般に白亜紀の諸岩石よりなる地域は堅硬な岩石よりなるのに反して、中新統は風化が進んでいる。油谷町下では、中新統分布地域で地じりを生じている所が多い。

地層および岩石一覽表

地質時代		地質系結	表層地質分類			
新 生 代	第四紀	沖積世	沖積層	砂 礫・砂・粘土	未固結堆積物	
		洪積世	洪積層	礫・砂・粘土		
	新第三紀	鮮新世	玄武岩	玄武岩質岩石	火山性岩石	
			安山岩	安山岩質岩石		
		中新世	油谷灣群	砂岩 礫岩・砂岩・頁岩互層		固結堆積物
			日置層群	砂岩 礫岩・砂岩・頁岩互層		
	古第三紀	漸新世	安山岩	安山岩質岩石	火山性岩石	
		始新世	玄武岩	玄武岩質岩石 安山岩質岩石		
	中 生 代	白亜紀	新白亜紀	玢石英斑岩	斑岩	深成岩
				閃緑岩～閃緑玢岩	斑岩質岩石	
花崗岩				花崗岩質岩石		
白亜紀		新白亜紀	阿武層群	流紋岩質岩石 安山岩質岩石	火山性石	
			閔門層群	安山岩・礫岩・砂岩・頁岩互層 礫岩・砂岩・頁岩互層	固結堆積物	
白亜紀	？古白亜紀	脇野層群	礫岩・砂岩・頁岩互層			

2 表層地質細説

I 末固結堆積物

I a 砂 (s)

海浜にそって局地的に分布する砂は沖積世に属するもので、三隅町望ヶ鼻南方、長門市只の浜、油谷町東立石、同町小田の北海岸、同町伊上～須方間などの海岸に分布する。比較的細粒の石英砂よりなることが多い。

I b 礫・砂・粘土 (gsm)

沖積層を構成する末固結堆積物は礫・砂・粘土よりなる。長門市正明市および日置村古市かう油谷町芝崎に至る平野部に広く分布するほか、各河川の周辺に分布する。

洪積層として段丘を構成する末固結堆積物は主として砂礫よりなり粘土を伴なう。長門市上川西かう深川湯本にかけての一帯、同市境川、日置村新市、油谷町伊上、豊北町角島の尾山に比較的広い分布がある。これのうち長門市深川の上ヶ原～開作では、上ヶ原礫層と呼ばれる扇状地性の砂礫層からなり、その上部は赤色作用を受けている。

II 固結堆積物

II a 砂岩 (ss)

砂岩のうち新第三紀中新世の油谷湾層群川尻細層に属するものは、豊北町角島沿岸、向津具半島の油谷湾沿岸、油谷町小田かう東立石に至る日本海沿岸に分布する。灰青～黒色粗粒～細粒砂岩、黒灰色頁岩、フリッシュ型の砂岩・泥岩互層よりなるが、砂岩優勢である。2～3枚の凝灰岩層を挟む。油谷町白石および本油谷では厚さ1.3～2 mのいわゆるLithothamnium石灰岩を1枚挟む。

中新世の日置層群人丸累層に属するものは、油谷町伊上南方、同町蔵小田、同町後畑に分布する。灰黒色細粒砂岩、砂岩・頁岩互層、塊状粗粒砂岩、凝灰岩を挟む淡青色頁岩およびこれらの互層よりなる。日置層群峠山累層に属するものは、日置村峠山南部、同村二位ノ浜から黄波戸を経て十楽までの地域、油谷町大江東部、同町蔵小田に分布する。青緑色粗粒砂岩、灰黒色頁岩、砂岩・頁岩互層、凝灰色砂岩および頁岩、凝灰岩、中礫礫岩よりなる。

I b 礫岩・砂岩・頁岩互層 (alt)

礫岩・砂岩・頁岩互層のうち、中新統油谷湾層群伊上累層に属するものは油谷町伊上～同町宮ノ馬場、同町角山に分布する。中礫～細礫礫岩、青色・赤紫色緑色など場所により種々の色を呈し、さうに場所により凝灰質となる細粒～粗粒砂岩、黒灰色頁岩および砂岩・頁岩互層よりなる。

中新統日置層群十楽累層に属するものは主として長門市十楽南西地域に分布し、大礫～中礫礫岩、中粒～細粒砂岩、青～緑黒色頁岩および凝灰岩よりなる。風化して赤紫色を呈することが多い。日置層群黄波戸累層に属するものは、日置村黄波戸今岬かう黄波戸を経て長門市西部に至る海岸に沿う地域、油谷町津黄南部、日置村野田かう大内山にかけて分布する。中礫礫岩、風化して黄褐色を呈する塊状青緑色粗粒砂岩、灰黒色頁岩～砂質頁岩、風化して黄褐色の砂岩～細礫礫岩、風化して白色を呈する青灰色凝灰岩（通称骨石）および砂岩、細礫礫岩互層よりなる。

白亜系関門層群下関亜層群に属するものは、三隅町沢江かう向山、長門市箕越・弁天島・黒瀬南方、日置村黄波戸に分布する。主として砂岩・頁岩・凝灰岩よりなり時に礫岩を挟む。また、関門層群脇野亜層群に属するものは三隅町平野～広田、油谷町伊上南方畑付近、日置村黄波戸口から二位ノ浜を経て油谷町上津黄までの海岸部に分布し、礫岩と砂岩を主とし、頁岩を伴なう。

I c 安山岩・礫岩・砂岩・頁岩互層 (An.alt)

関門層群下関亜層群に属し、三隅町三隅中の小島山一帯および同町鉄割山一帯に分布する。安山岩～石英安山岩質凝灰岩・凝灰角礫岩・礫岩・砂岩および頁岩よりなる。小島山一帯は安山岩質岩石が優勢である。

II 火山性岩石

II a 流紋岩質岩石 (Ry)

白亜系阿武層群熊野岳累層および青海累層に属する。長門市青海島、長門市正明市より豊北町阿川に至る「仙崎」および「阿川」両図幅の南端部に広く分布する。流紋岩質凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、流紋～石英安山岩質凝灰岩を主とし、凝灰角礫岩・凝灰岩・礫岩・砂岩・頁岩を伴なう。岩石は一般に堅硬である。

II b 安山岩質岩石 (Ab)

中新世前～中期に属する日置層群および油谷湾層群中に貫入する古銅輝石普通輝石安山岩は油谷町赤屋・小田・久原などにおいてNW～NNW方向の断層に沿って細長い岩脈として小規模に産する。

古第三紀漸新世と考えられる含紫蘇輝石ピジョン輝石普通輝石橄らん石安山岩および橄らん石安山岩（津黄安山岩と呼ばれている）は油谷町津黄かう日置村黄波戸口まで分布し、白亜系関門層群を不整合でおおい、中新統日置層群に不整合でおおわれている。また、角島尾山東部に分布する普通輝石安山岩も津黄安山岩と同時期のものと考えられている。

白亜系阿武層群に属する安山岩質凝灰岩は長門市草添山北方および日置村狩音南方にわずかに分布する。

これらのほか、安山岩質岩石に属する白亜紀末の貫入岩である玢岩が豊北町阿川一帯に分布する。

Ⅲ a 玄武岩質岩石 (B)

鮮新世～洪積世の橄らん石粗面玄武岩は日置村矢ヶ浦岳，同町千疊敷南方，油谷町妙見山から雨乞山，同町向津具～油谷島，豊北町角島，同町島戸，同町大浦岳にまとまった分布が見られる。そのほか，長門市青海島の山島山・高山，日置村成瓜山などに小岩体がある。溶岩が主体であるが，少なくとも数枚の火山礫凝灰岩および礫岩をはさむ。

古第三紀始新世の紫蘇輝石橄らん石玄武岩（今岬玄武岩と呼ばれている）は日置村今岬に小岩体が分布する。阿武層群熊野岳累層を不整合関係でおおい，日置層群に不整合でおおわれる。溶岩が主体で火山角礫岩を伴なう。

Ⅳ 深成岩

Ⅳ a 花崗岩質岩石 (Gr)

白亜紀末の花崗岩は日置村奥畑に小岩体が分布する。風化がいちぢるしい。

Ⅳ b 斑岩質岩石 (Gb)

石英斑岩，文象斑岩などよりなる小貫入岩体で各地に認められる。長門市深川にやや広い分布がある。一般に堅硬で風化を受けていないことが多い。

Ⅴ 応用地質

Ⅴ a 鉱床

本図幅中には，現在稼行中の鉱山はない。

V b 温泉および鉱泉

本図幅中には次に示す鉱泉がある。

温泉地名	所 在	泉 質	泉温(°C)
な し	長門市仙崎町青海湖畔	放射能泉	18
な し	同市青海島朝鍋海域	食塩化工類 食塩放射能泉	18
な し	長門市仙崎字三百田3842	放射能泉	18

V c 地 じ り 地

本図幅には次に示す地じり地がある。

地 名	地 質 系 統	表 層 地 質 分 類
日置村黄波戸	日置層群黄波戸・峠山累層	砂 岩
日置村浅津～茅刈	日置層群黄波戸・峠山累層	礫岩・砂岩頁・岩互層
油谷町上津黄	油谷湾層群川尻累層	砂 岩
油谷町後畑	津黄安山岩	安山岩質岩石
油谷町青村	日置層群人丸累層	砂 岩
油谷町西山	油谷湾層群川尻累層	砂 岩
油谷町上小田	油谷湾層群川尻累層	砂 岩
油谷町赤屋	油谷湾層群伊上累層	礫岩・砂岩・頁岩互層
油谷角山	油谷湾層群伊上累層	礫岩・砂岩・頁岩互層
油谷掛瀧	油谷湾層群伊上累層	礫岩・砂岩・頁岩互層
油谷町川尻	日置層群人丸累層	砂 岩
油谷町田久道	油谷湾層群川尻累層	砂 岩
油谷町白木～久津～大浦	油谷湾層群川尻累層	砂 岩
油谷町木油谷	油谷湾層群川尻累層	砂 岩

(河野通弘 岡村義彦 村上允英 三上貴彦 西村裕二郎)

Ⅲ 土 壤

1 土壤の概要

1.1 山地・丘陵地の土壤

この地域は、山口県の北部に位置し、日本海側に面した長門山地とその山麓部、豊北丘陵および向津具半島と青海島、角島の二島嶼を包含する。土壤の分布は、これら山地および丘陵地を形成している基岩と密接な関係を示すほか、微地形の相違に由来する土壤の堆積様式と、水分環境の違いによる土壤断面の形態の特徴から、次表の5統群、16統に細分される。

山地、丘陵地の土壤一覧表

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統	母 材	土 壤 型(堆積型)
色褐森林土	乾性褐色森林土壌	1) 右田岳 1 統 (Mig1)	} 花崗岩類	B _A ・B _B (残積)
		2) 右田岳 2 統 (Mig2)		B _B ・B _C (匍行)
		3) 荒滝山 1 統 (Ara1)	中・古生層	B _A ・B _E ・B _C (残積)
		4) 向山 1 統 (Muk1)	} 玢岩類	B _A ・B _B (残積)
		5) 向山 2 統 (Muk2)		B _B ・B _C (匍行)
	乾性褐色森林土壌(赤褐色)	6) 小野 統 (Ono)	中・古生層 閃緑岩	r B _B ・r B _C (残積)
		7) 宇部 1 統 (Ube1)	第三紀層	r B _B ・r B _C (残積)
		8) 津黄 統 (Tuō)	安山岩	r B _B ・r B _C (残積)
		9) 東台 1 統 (Hig1)	玄武岩	r B _B ・r B _C (残積)
	乾性褐色森林土壌(黄褐色)	10) 阿武 1 統 (Abu1)	} 流紋岩類	y B _A ・y B _B (残積)
		11) 阿武 2 統 (Abu2)		y B _B ・y B _C (匍行)
		12) 宇部 2 統 (Ube2)	第三紀層	y B _B ・y B _C (匍行)
	褐色森林土壌	13) 荒滝山 2 統 (Ara2)	} 中・古生層	B _{D-d} ・B _D (匍行)
		14) 荒滝山 3 統 (Ara3)		B _D (崩積)
		15) 阿武 3 統 (Abu3)	流紋岩類	B _D (崩積)
褐色森林土壌(赤褐色)	16) 東台 2 統 (Hig2)	玄武岩	r B (崩積)	

1.2 台地・低地の土壌

本図幅の低地は、主に深川川、掛淵川、久富川、大坊川などの沖積地に分布している。これら低地の大部分は、市街地を除き主に水田として利用されており、畑作地帯としてはみるべきものはない。

台地は、向津具半島の玄武岩台地があり、その他のものとしては、崩積性の台地が各地に散在している程度である。これら台地は主に水田として利用されており、畑地は小面積である。

本地域の台地土壌は、母材の影響から土性は強粘質～粘質土壌が多い。しかし低地土壌は、粘土分の分散、礫層の出現、地下水の高低など変化に富む土壌が形成されている。

本図幅内に分布する台地低地土壌は、断面形態、母材、堆積様式の異同により、8土壌統群、30土壌統に区分される。

(井尻 敏文)

2 土壤細説

2.1 山地・丘陵地の土壤

○乾性褐色森林土壤

花崗岩類，中古生層を母材とし，山地の尾根筋かう山腹にかけて広く分布する乾性～弱乾性の土壤である。

1) 右田岳1統 (Mig1)

花崗岩類を母材とする乾性土壤で，小起伏山地の山腹上部かう尾根筋に分布する。全土層が浅く砂礫質で，腐植層は浅いか又は，欠く場合がある。表層かう下層にかけて外生菌根が混在しているほか，土壤構造は細粒伏構造を呈する。水分と土壤養分に乏しく，林木の生育はきわめて不良である。

2) 右田岳2統 (Mig2)

この土壤は，上記1統土壤と同一山地の山腹下部に分布する弱乾性の土壤で，上記1統に比較して，わずかに林層は厚くなるが全般的に淡色で，下層は堅密に堆積している。林木の生育は不良である。

3) 荒滝山1統 (Aya1)

中生層を母材とする山地の尾根筋に出現する乾性の土壤（BB型）である。乾燥条件下にあり，堆積した落葉，落枝の分解は進まず，下層への腐植の浸透は悪い。林木の生育は不良である。

4) 向山1統 (Muk1)

玢岩質岩石か母材とする乾性の土壤で，尾根筋かう山腹上部にかけて出現する。全土層は浅く淡色で，生産力は劣る。

5) 向山2統 (Muk2)

この土壤は，向山1統土壤と同一地域の山腹斜面に出現する弱乾性の土壤である。1統土壤と比較して土層は厚いが，下層はやや堆質なため腐植の浸透はあまりよくない。林木の生育はやや不良である。

○乾性褐色森林土壤（赤褐系）

山地の巾広い尾根筋や，山麓地および丘陵地に出現する。下層が5YRかう2.5YRの色調を呈する埴質な残積性の土壤である。

6) 小野統 (Ono)

第3紀層・安山岩・玄武岩以外の岩石を母材とする乾性の土壤で、腐植層を欠く場合が多く、下層は堅密で、物理性は不良である。林木の生育は不良であるが、全土層は深く、しかも緩斜面にあるため、果樹園等に人工改変することが容易である。

7) 宇部1統 (Ube1)

第三紀層を母材とするやや未熟な乾性土壤で、腐植層が浅いかまたは、欠く場合がある。下層はおおむね埴質で、堅密な堆積を示す場合が多い。小野統と同様林木の生育は不良であるが、果樹園に人工改変することが容易である。

8) 津黄統 (Tuo)

安山岩を母材とする赤褐色ないし暗赤褐色の乾性土壤で、生成的には小野統や宇部1統とは全く別のもので、火山活動にともなう風化物と思われる。腐植層は一般に浅く、断面全体が堅密でカベ状を呈する。かなり強酸性で、比較的生産力の低い土壤である。

9) 東台1統 (Hig1)

玄武岩を母材とする乾性の土壤で、向津具半島部に分布する。有効土層は深いが埴質で、下層は堅密に堆積している。林木の生育はやや不良である。

◦ 乾性褐色森林土壤 (黄褐色)

流紋岩類および第3紀層からなる山地、丘陵の尾根筋や山腹の緩斜面に出現する黄褐色 (10YR) の乾性土壤である。

10) 阿武1統 (Abu1)

流紋岩類を母材とする山地の尾根筋に出現する乾性の酸性土壤で、腐植層および有効土層が浅い。下層は埴壤土で堅密に堆積しており、通気性や透水性が劣る。林木の生育は不良である。

11) 阿武2統 (Abu2)

この土壤は、阿武1統土壤と同一山地の山腹斜面に出現する弱乾性の土壤である。土性は壤土一埴壤土で、腐植の下層への浸透は弱く、土層は堅密に堆積している。林木の生育はやや不良である。

12) 宇部2統 (Ube2)

第三紀層を母材とする乾性の土壌で、丘陵地の凹部に出現する。一般にA層の発達が悪く、土壌中の腐植の含量はきわめて少ない。酸性が強く、塩基に乏しいやせた土壌で、林木の生育は不良である。

○褐色森林土壌

山地の山腹斜面および山腹下部の崩積土斜面や沢筋に分布する。厚くて膨軟な腐植層と、透水性のよい土層からなり、水分の供給にもめぐまれて、林木の生長は良好である。

13) 荒滝山2統 (Ara2)

荒滝山1統と同一地域の山腹斜面に分布するやや乾性の適潤土壌で、BD~d型およびBD型土壌が含まれる。旬行土のため土壌堆積は不安定で腐植層はやや薄く、下層への腐植の浸透も弱い。ヒノキは良好な生育をしているが、スギはやや劣る。

14) 荒滝山3統 (Ara3)

荒滝山1, 2統と同一山地に分布する。斜面下部、沢筋、山腹凹部に崩落堆積物を母材として生成された適潤性の土壌で、全土層は厚く、角礫に富む。そのため腐植の浸透も良好で、団粒状構造がよく発達している。また水の供給にもめぐまれており、スギの生育は良好である。

15) 阿武3統 (Abu3)

阿武1, 2統と同一山地に分布する。斜面下部や沢筋の崩落堆積物を母材として生成された適潤性の土壌で、角礫に富む。全土層は厚いが、下層への腐植の浸透があまりみられず、上記荒滝山3統にくらべて林木の生育はやや劣る。

○褐色森林土壌 (赤褐色)

玄武岩台地の山脚部に分布する適潤性の土壌で、下層は赤褐色を呈する。

16) 東台2統 (Hig2)

東台1統と同一地域に分布する。山脚部の凹型斜面で崩落堆積物を母材として生成された適潤の土壌で、腐植層は膨軟で有機物に富むが、下層は堅密でカベ状を呈する。林木の生育は比較的的良好である。

(資料)

1. 山口県林業試験場 (1956~1968) : 民有林適地適木調査報告
2. 経済企画庁 (1969) : 土地分類基本調査1/5万 (防府)
3. " (1973) : 縮尺1/50万土地分類図 (山口県) (藤原俊廣)

2.2 台地・低地の土壌

砂丘未熟土壌

この土壌は海岸砂丘にあってA層の発達弱い全層砂質よりなる土壌である。土地利用は主としてクロマツの人工林である。

1) 岐波統 (Ki)

海岸沿岸の全層砂質よりなる土壌で、層位分化の未発達土壌である。

○黄色土壌

この土壌は山地丘陵地及び台地に分布する土壌を包含する。山地斜面に分布する土壌は、作土下または30cm以内から以下が礫層をなす場合が多い。本土壌は崩積の影響が強い残積及び洪積世堆積土よりなる。

2) 大原統 (Oha)

本土壌は台地及び山麓斜面に分布する黄褐色の畑土壌で、土性は強粘質であり、腐植層序、酸化沈積物はなく、土層中に礫層、砂礫層および礫を混在する砂層はない。

3) 北多久統 (Kit)

本土壌は山麓斜面に分布する黄褐色の水田土壌で、土性は強粘質であり、土層中に斑鉄のほかマンガン結核を含む。未風化ないし腐朽礫を含むことが多く、60cm以下に礫層または未風化～腐朽岩盤が出現することもある。

4) 新野統 (Ara)

山麓斜面に分布する黄褐色の水田土壌で、土性は粘質であり土層中に斑鉄のほかマンガン結核を含む。未風化ないし腐朽礫を含むことが多く、60cm以下に礫層または未風化～腐朽岩盤が出現することもある。

褐色低地土壌

この土壌は主として沖積低地面に分布する水田土壌で、作土を除きほぼ全層が黄褐色を呈する。水田土壌化作用が未熟な比較的新らしい沖積物を材料とする土壌である。

5) 中島統 (Nas)

本土壌は山麓斜面に接する低地に分布する黄褐色水田土壌で、作土下50cmの平均土性は強粘質である。土層中60cm以内には礫層、砂礫層および礫を混在す

る砂層はない。

6) 大沢統 (Osa)

本土壤は黄褐色水田土壌で、作土下50cmの平均土性は粘質で、礫層は30~60cm以下に出現する。

7) 八口統 (Yat)

本土壤は黄褐色水田土壌で、作土下の土性は砂質~壤質で、礫層は30~60cm以下に出現する。

◦ 細粒灰色低地土壌

本土壤は作土下の土色が灰色~灰褐色を呈し、土性は粘質~強粘質の土壌である。本土壤の灰色または灰褐色土層は水田土壌化作用によって変成したB層で、斑鉄を含みときに鮮明なマンガン結核がみとめられる。

8) 佐賀統 (Sag)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が強粘質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

9) 宝田統 (Tak)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が粘質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

◦ 灰色低地土壌

本土壤は作土下50cmの平均土性が壤質よりなる灰色~灰褐色の水田土壌である。

10) 加茂統 (Km)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が壤質であり、斑鉄を含む。

11) 清武統 (Kyt)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が壤質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

◦ 粗粒灰色低地土壌

本土壤は作土下50cmの平均土性が砂質よりなるか、または30~60cm以内もしくは30cm以内より以下が礫層または砂礫層よりなる灰色低地土壌を包含する。

12) 豊中統 (Toy)

低地に分布する粗粒灰色水田土壌で、ほぼ全層が砂質よりなる土壌である。

13) 久世田統 (Kus)

低地に分布する粗粒灰色水田土壌で、下層が礫層または砂礫層よりなり、礫層上の土性は粘質～強粘質である。礫層または砂礫層の出現位置は30～60cmの間である。

14) 追子野木統 (Okk)

低地に分布する粗粒灰色水田土壌で、下層が礫層または砂礫層よりなり、礫層上の土性は壤質～砂質の土壌である。礫層または砂礫層の出現位置は30～60cmの間である。

15) 国領統 (Kok)

低地に分布する粗粒灰色水田土壌で、40cm以内に礫層または砂礫層が出現する。

○ 細粒グライ土壌

本土壌は表層が灰色土層よりなり下層がグライ層よりなる土壌と、全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、作土下50cmの平均土性が強粘質または粘質の土壌である。

16) 富曾亀統 (Fus)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、作土下50cmの平均土性が強粘質であり、斑鉄は30cm以内に出現する。

17) 田川統 (Ta)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、作土下50cmの平均土性が強粘質であり、斑鉄は30cm以下にも出現する。

18) 東浦統 (Hig)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、作土下50cmの平均土性は粘質である。斑鉄は30cm以下にも出現する。

19) 西山統 (Nis)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、作土下50cmの平均土性は粘質である。斑鉄は30cm以内に出現する。

20) 幡野統 (Hat)

置層が灰色土層で下層がグライ層よりなる土壤で、作土下50cmの平均土性は強粘質であり、マンガン結核は含まず、構造がある。

21) 川副統 (Kws)

表層は灰色土層、下層がグライ層よりなり作土下50cmの平均土性が強粘質の土壤である。土層中にマンガン結核を含む。

22) 浅津統 (Aso)

置層は灰色土層、下層がグライ層よりなり作土下50cmの平均土性が粘質の土壤で、土壤中にはマンガン結核を含まず構造がある。

○グライ土壤

本土壤は作土下50cmの平均土性が壤質よりなるグライ土壤を包括したもので、ある。

23) 芝井統 (Sib)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、作土下の平均土性が壤質であり、斑鉄の出現は30cmまでである。

24) 滝尾統 (Tko)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、作土下の平均土性が壤質であり、斑鉄は30cm以下にも出現する。

25) 上兵庫統 (Khy)

表層が灰色土層、下層がグライ層よりなり、作土下50cmの平均土性が壤質の土壤である。土層中にマンガン結核を含む。

26) 新山統 (Nii)

置層が灰色土壤、下層がグライ層よりなり、作土下50cmの平均土性が壤質の土壤である。土層中にマンガン結核を含まず、構造がない。

○粗粒グライ土壤

本土壤は作土下50cmの平均土性が砂質よりなるか、または地表より30cm以内から、もしくは30～60cmの間に礫層または砂礫層よりなるグライ土壤を包括したものである。

27) 片桐統 (Kat)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、作土下50cmの平均土性が砂質よりなる土壌である。斑鉄は30cm以下にも出現する。

28) 竜北統 (Ryu)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壌で、地表より30cm以内に礫層または砂礫層が出現する。礫層または砂礫層上の土性は砂質である。

29) 八幡統 (Ywt)

置層は灰色土層、下層がグライ層よりなる土壌で、土性はほぼ全層が砂質である。

○黒泥土壌

本土壌は泥炭層が上部50cm以下にあり、黒泥層がある土壌、または泥炭層がなく黒泥層のある土壌である。

30) 北無田統 (Ki)

黒泥層が上層50cm以内に出現し、黒泥層の厚さが20cm以上で、土性は強粘質～粘質の土壌である。

資 料

1. 山口県農業試験場 (1964) : 施肥改善事業成績
2. 〃 (1966) : 地力保全基本調査成績
2. 農林省農業技術研究所 (1972) : 土壌統の設定基準および土壌統一覧表

(井尻 敏文)